

## 論文

# テキストマイニングによる 中山間地域における観光客の分析 —埼玉県飯能市を対象に—

山 崎 義 広

## 要 約

本研究は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大に伴い、度重なる行動自粛が求められた時期における、国内観光客の意向を明らかにすることを目的とする。そのために関東圏の中山間地域の市（埼玉県・飯能市）への観光意向を持つ人々を対象に計量テキスト分析を実施した。その結果、自然資産を中心とした地域への様々な評価が明らかとなった。これにより飯能市がマイクロツーリズムの好地と見なされていることが示唆された。

キーワード：計量テキスト分析，中山間地域，飯能市，マイクロツーリズム

## 1. 研究の背景

世界的にまん延した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大は、我が国における観光業においても甚大な影響を及ぼしている。いわゆる「コロナ禍」以前の我が国の観光産業は、インバウンド需要により過熱とも言える状況であり、2019年における訪日外客数は約3,188万人に達していた。しかし、入国制限により2020年12月には年間で87.1%減の約411万人となり、2021年は245,900人（2019年比99.2%減）にまで減少した<sup>1)</sup>。国内における旅行需要（観光・ビジネス・帰省等含む）も大きく減少した。2019年の日本人国内旅行消費額は21兆9,312億円であったのに対し、2020年は9兆9,738億円（前年比54.5%減）となり、2021年は9兆1,835億円（2019年比58.1%減）まで減少した<sup>2)</sup>。2022年の時点においても完全な収束は見えない中、我々のライフスタイルも含め今後の観光業のあり方について課題は山積している。

こうした事態は都市部への一極集中やそこでのライフスタイルに対し、改め

て見直される契機となった。東京都23区では2020年5月において、2013年以降初めて転出が転入を上回り、7月以降転出超過で推移した。2021年の3大都市圏（東京圏、名古屋圏および大阪圏）の転入超過数を見ると、全体では6万5,873人の転入超過であったものの、前年からの縮小傾向が見られた<sup>3)</sup>。これらの推移は一概に新型コロナウイルス感染拡大による影響とは言えないものの、それ以前の内閣官房による調査によれば東京圏在住者の約半数が地方圏での暮らしに関心を寄せ、若い世代になるほどがその傾向が強くなることが指摘されていた<sup>4)</sup>。いわゆる「移住ブーム」は定期的に繰り返されてきたが<sup>5)</sup>、単なる一過性のブームではなく、より多様な暮らし方、働き方の模索が今後続くだろう。

これからの都市部と地方圏をめぐるライフスタイルと観光については様々な議論が続いている。小林（2021）は地域ブランディングの見地から、その政策の変容と今後のあり方を指摘している。新型コロナウイルス感染拡大以前の地域ブランディング政策の要点は、既存の資源の活用、新たな観光資源の創出、ニューツーリズムの開発とされていた。しかし、上述したように地方移住への関心の高まりを背景とした関係人口や交流人口といった既存の取り組みは、人々の移動に制約が無かった状態が前提であった。このため、小林は小田切（2019）による関係人口概念をふまえ、従来型の関係人口・交流人口を増やし定住人口拡大を目指すというリニアな想定を見直す必要があるとしている<sup>6)7)</sup>。また、岡本（2020）によれば消費者にとっての旅行に求める意義の変化（そこに行く必要性の明確化）や、これまでのオーバーツーリズムの弊害の見直し、オンラインの体験への注目といった、収束後のツーリズムのあり様が指摘されている<sup>8)</sup>。さらに村山（2020）は観光におけるデジタル活用という視点において、地方のホテルや旅館といった受け入れる側が、DX（デジタルトランスフォーメーション）を推進する好機であると指摘している<sup>9)</sup>。様々な議論と提言が続き、「ポストコロナ」、「WITHコロナ」、「新しい生活様式」などの言葉が飛び交う中、これからの観光のあり方、関係人口といった地方との関わり方への意識の変化など、マクロ環境の激変とパラダイムシフトを迎えているといえよう。

そうした中で新型コロナウイルス感染拡大期における新たな旅行形態として、「マイクロツーリズム」が注目を集めている。マイクロツーリズムとは、自宅から1～2時間程度の距離の近場で過ごす近距離旅行の形態をさす。公共交通

機関の利用を避けた自家用車による移動を中心とし、地域の魅力の再発見と地域経済への貢献を念頭においているという<sup>注1)</sup>。こうした取り組みは新型コロナウイルスの感染拡大期であっても、様々な土地を訪れ楽しみたいという人々の旅行に対するニーズへ対応し、感染対策を両立させた上で観光産業を維持させるための苦肉の策であるといえよう。また「地域の魅力の再発見」が謳われるように、特に都市圏からのマイクロツーリズムにより、手軽に豊かな自然に触れることが可能な中山間地域への注目が集まる好機とも捉えられる。

そこで本研究はそうした激変する環境下において、特に中山間地域をめぐる観光客の意識に着目した。新型コロナウイルス感染拡大期における、中山間地域に対する観光客の訪問意向はどのような傾向が見られるのだろうか。感染が拡大し様々な措置の発令が頻発した時期においても、普段住んでいる場所とは違う場所を訪れたいという国内観光客の潜在的需要は一定程度存在することが予想される。他方、日本は2022年6月から約2年ぶりに外国人観光客の受け入れを段階的に行った状況にある。こうした特殊な環境下において、国内観光客が中山間地域の観光地にどのような訪問意向を示したかという分析は、今後の観光のあり方に重要な示唆を与えるだろう。そこで本研究では埼玉県飯能市をフィールドとした調査を行う。

## 2. 埼玉県飯能市について

飯能市は埼玉県南西部に位置する人口は約79,000人の市である（令和4年1月時点）。市の北西部は山地で、南東部は丘陵地、台地にわけられる。北の高麗丘陵と南の加治丘陵の間の台地部分に分け地が発達している（飯能市HPより）。市域の約75パーセントを森林が占める中山間地域である。飯能市は古くは林業と織物の町として栄えたが、昭和40年代から宅地化が進展し、首都圏の近郊住宅都市として変化・発展してきた背景がある。都心から約50km圏内に位置し、池袋からの特急により最短で約40分でアクセスが可能となっている。古くから豊かな自然に恵まれた飯能市は、2005年に「森林文化都市」の宣言を行い、エコツーリズムを推進するなど自然との共生を志向するまちづくりを進めてきた。

一方で2020年度実施の国勢調査によれば飯能市の高齢化率は約31%となっている<sup>10)</sup>。2014年には民間研究機関「日本創生会議」から埼玉県における、いわ

ゆる「消滅可能性都市」にあげられた。その後、2015年から2020年の人口増減率はマイナス0.4%となっている<sup>10)</sup>。2040年の将来推計人口は約60,000人<sup>12)</sup>となっており、こうした状況に対し市を「発展都市」とするための様々な取り組みがなされてきた。その成果の一つとして、市の誘致により2019年にはムーミンバレーパーク・メッツァビレッジが宮沢湖畔にオープンした。これを契機に従来の振興計画では定住人口の増加のみが目標に掲げられていたのに対し、交流人口が付け加えられることとなった。また飯能河原や天覧山周辺など、既存の観光資産を「都市回廊空間」と設定するなど、市をあげての各種の整備事業が進められていた<sup>11)</sup>。

一般社団法人「奥むさし飯能観光協会」によれば、飯能市の観光客は関東近辺の居住者が多いとされている<sup>13)</sup>。飯能駅から徒歩15分程度で飯能河原や天覧山の入り口まで行くことができるため、遠足などで使われることもあるという。ムーミンバレーパーク・メッツァビレッジの誘致を契機に、飯能河原と天覧山、宮沢湖とムーミンバレーパークが飯能市の観光名所として認知度があがったという。また飯能市による第5次総合振興計画では「水と緑の交流を活かす街」が基本政策の一番目に位置付けられることとなる。奥むさし飯能観光協会によれば、これは「新たな交流と観光の推進」と「エコツーリズムの推進」の二本柱が軸となり、飯能市の行政計画に観光が全面に打ち込まれるようになったことを意味すると指摘する。このように大型テーマパークの誘致を契機とした、観光事業への注力がなされていたことが伺える。しかし、2020年の新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、その状況は大きく変わる事となった。

飯能市においても2020年度当初より新型コロナウイルス感染症の拡大がみられ、4月7日に緊急事態宣言が発出された。これに伴い、奥むさし飯能観光協会側も観光案内所を閉鎖するなどの措置を行ったという。その一方で、落ち込んだ旅行需要を喚起するため、宿泊を伴う旅行および日帰り旅行代金の一部を国が補助する観光支援策である「Go Toトラベル事業」も活用した。飯能の自然を活かした釣り・バーベキューの日帰りツアー企画は好評であったという。しかし、続く2021年度においても新型コロナウイルス感染症拡大を迎え、徹底的に冷え込んだ需要に直面する。あらゆる市内のイベントが中止される一方で、観光地域づくり法人（登録DMO）へ候補として登録されるなど、前向きな取り組みも進めていた。

これらに加えインバウンドが遮断されている特殊な状況において、飯能市への観光に人々はどうのよう意向を示すのだろうか。中山間地域の観光地への国内消費者の意向を明らかにすることは、今後の観光消費のあり方に貴重な示唆を与えるだろう。そこで、首都圏近郊にあり自然を中心とした観光資源を有する埼玉県飯能市について、観光意向を持つ人々に対しアンケート調査を実施する。

### 3. 調査の方法

#### 3.1 調査対象と分析方法

調査対象は埼玉県飯能市に訪問意向のある観光客とした。アンケートの計画、実施およびデータの収集は、奥むさし飯能観光協会によりインターネットで行われた。調査期間は2021年6月から12月である。本調査期間は外国人観光客の入国制限が実施され、埼玉県では「まん延防止等重点措置」、「緊急事態措置」、「経過措置期間」が設けられた期間にあたる。また埼玉県近郊では神奈川県、千葉県が同様の措置がなされた期間である。東京都は6月1日から6月20日にかけて「緊急事態措置」が、6月21日から7月11日に「まん延防止等重点措置」が発令され、以降は断続的に「緊急事態措置」が発令された。さらに10月1日から1か月間「経過措置期間」が設けられた時期にあたる<sup>注4)</sup>。こうした期間内に実施されたアンケートへの回答は829件であった。このアンケート調査結果から、クロス集計により属性と訪問意向の関係を把握した。自由回答記述における満足度の内容についてはテキストマイニング（計量テキスト分析）を行った。

計量テキスト分析についてはKH Coder (3. Beta. 04a)<sup>12)</sup>を使用し、共起ネットワーク分析と対応分析を行った。またワードクラウドについてはNvivo (QSR International社)を使用した。

#### 3.2 計量テキスト分析の概要

アンケート内において「飯能の観光の総合満足度」への回答に対し、その理由について自由記述を求めている。この自由記述回答についてKH Coder<sup>12)</sup>で分析した。記述についての分量の指定は無い。各々の回答は無回答の0文字から最長で1,262文字であった。データの読み込み時には前処理として、「飯能」と「思う」を使用しない語として設定した。「飯能」は質問内容にかかる頻出

語であり、「思う」は文末の感想の表現方法として用いられ別の趣旨で使われることが多く、分析の語の対象としては不適切と判断したためである。その結果、745の回答に対し、16,546（使用6,946）語が抽出された。また、文章データに加え「回答者の年代」、「居住地域」への回答を外部データとして入力した。分析は1．抽出語の分析と、2．頻出語間の共起性の分析、これに付随して3．頻出語と外部変数の対応分析を行った。1と2では自由記述に対する全般的な傾向を把握し、3では外部変数との関係を分析することを目的としている。また同一データに対し、Nvivo（QSR International社）によってワードクラウドによる可視化を試みた。

## 4. 結 果

### 4.1 クロス集計

回答の各種の項目の中からクロス集計により結果を示す。性別と年代のクロス集計においては、40代（女性146名、男性85名）、50代（女性145名、男性56名）、30代（女性115名、男性47名）が、主な訪問者の年代層となった。またいずれの年代においても女性が男性の回答数を上回る結果となった。他方、20代の若年層と70代以上の高齢者層は、いずれも他の年代層に比べ、少ない回答となった（Table 1）。

次に回答者の居住地と飯能市への訪問回数を集計したものがTable 2である。

Table 1 世代と性別のクロス集計表

		性 別			合計
		男性	女性	その他	
世代	20代	29	48	1	78
	30代	47	115	0	162
	40代	85	146	0	231
	50代	56	145	0	201
	60代	57	71	0	128
	70代以上	11	12	0	23
	その他	3	3	0	6
合 計		288	540	1	829

Table 2 居住地と飯能市への訪問回数のクロス集計表

		飯能市への訪問回数					合計
		初めて	2回目	3～5回目	それ以上	市内在住	
飯能市							105
居住地	飯能市近郊（所沢市，入間市，日高市，狭山市，秩父市）	10	6	10	134		160
	その他埼玉県内	54	28	50	116		248
	東京都，千葉県，神奈川県	87	36	45	123		291
	その他の県	13	1	1	10		25
合 計		164	71	106	383	105	829

回答者全体からみて約1割程度が飯能市内在住者であった。それ以外では、東京都や千葉県，神奈川県といった埼玉県以外の近郊県からの回答が約4割を占め，最も多い結果となった。続いて埼玉県内とした回答が約3割であり，飯能市と隣接するような近郊の市からの回答が約2割を占めた。また飯能市内在住と回答した者を除く，訪問回数で見た場合，どの居住地に対する回答においても5回以上（それ以上）との回答が約半数を超える結果となった。東京都などの埼玉県以外の近郊県は続いて「初めて」と回答する者が続いた。その他埼玉県内と回答する者に対し，飯能市近郊の市からの回答者は「初めて」，「2回目」，「3～5回目」とする回答が相対的に少なかった。

続いて飯能市への観光にあたって同行した相手（誰と一緒に観光したか）と，世代についての回答数を集計したものがTable 3である。結果は全体を通じて「ファミリー」と回答した者が全体の約4割を占め最多となった。続いて「夫婦」と回答したものが約3割であり，これに「友人・グループ」，「一人旅」が続いた。

## 4.2 自由記述に対する頻出30語の分析

全対象者のデータをもとに，まず自由記述における出現頻度の高い単語について上位30語を抽出した（Table 4）。飯能市への観光に対する満足度への理由を記した記述で，最も出現頻度が高い語は「自然」の172回であり，続いて「観



Table 3 同行者と世代のクロス集計表

		20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	その他	合計
同行者	ファミリー	17	99	118	43	30	6	0	313
	夫婦	14	36	53	81	65	11	0	260
	友人・グループ	20	12	22	42	17	4	0	117
	一人旅	9	9	27	24	11	1	0	81
	カップル	14	4	7	3	0	0	0	28
	その他	4	2	4	8	5	1	6	30
合 計		78	162	231	201	128	23	6	829

Table 4 自由記述で出現頻度が高い語と出現回数（上位30語）

自然	172	多い	42	満足	27
観光	80	近い	38	奇麗	27
行く	80	山	37	スポット	26
良い	74	訪れる	35	楽しむ	26
豊か	65	感じる	33	紅葉	26
美味しい	60	子供	32	たくさん	25
来る	60	ムーミンバレーパーク	31	時間	25
場所	53	施設	31	出来る	25
楽しめる	48	川	28	コロナ	24
楽しい	43	公園	27	人	24

光」,「行く」が80回であった。また「豊か」,「美味しい」,「良い」,「楽しめる」,「楽しい」など、評価に関する語が頻出している。そして、「場所」,「山」,「ムーミンバレーパーク」,「施設」,「川」,「公園」など、訪問意向対象と関連した語の出現頻度が高い。

#### 4.3 頻出語間の共起性の分析

Table 4に示した抽出語間の関係を分析するために、抽出語の共起ネットワークを出力した結果をFigure 1に示した。出力する際の設定は、集計単位を文とし、最小出現数を18、最小文書数を1、描画する共起関係を上位60語、品



詞による語の取捨選択はデフォルトのままとした。出力される共起関係はJaccardに設定し、ネットワーク図はサブグラフ検出 (random) で表示した。描画されている語数 (node) は44, 共起関係の数 (edge=線) は60, 密度 (density) は0.63, 最も弱い共起関係のJaccard係数は0.1が抽出された。

Figure 1が表すところは、語の出現回数は図形(円)大きさに比例し、共起・関連の強さは図形の位置や近さではなく線で接続されているか否かとその強さで表現されている。つまり多い語ほど大きな円となり、円を結ぶ線が濃いほど共起関係が強いことを示している。また、ここでの共起関係とは、同一文章内で当該の2語が出現する確率が高いことを意味する。こうした語の共起性の分析は頻出語のみでは読み解けないデータ内の語の関係性の推測に適していると考えられる<sup>12)</sup>。

## 観光の満足度の理由と抽出語の関係

飯能市への観光に対する満足度の自由記述の共起ネットワーク (Figure 1) から、主に6つのグループが検出された。それぞれの頻出語の共起関係と自由

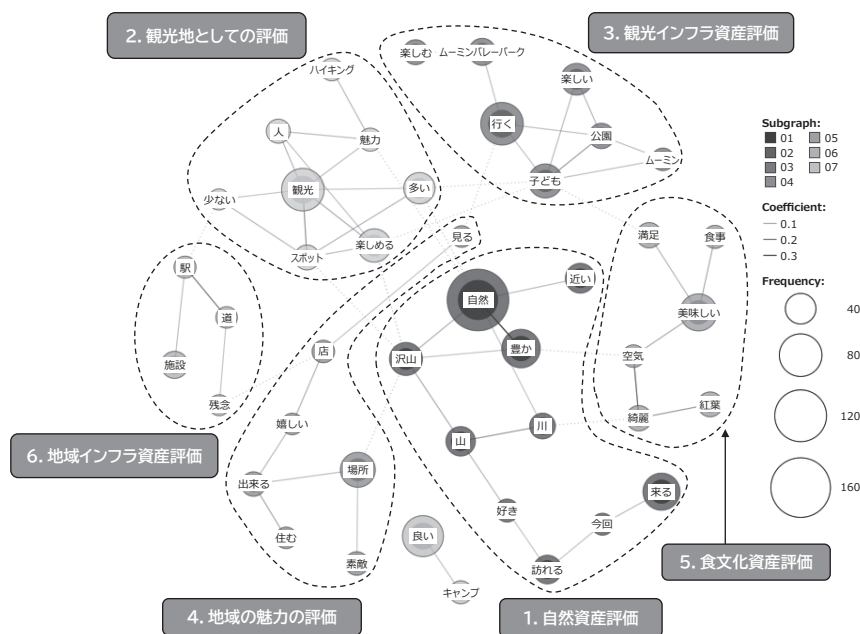


Figure 1 抽出語の共起ネットワーク

記述分のデータから以下のように命名した。

(1) 自然資産評価

第1のグループでは「自然」を中心に「豊か」、「近い」、「沢山」、「川」が実線でつながれ、破線で関連した「魅力」、「多い」といった自然資産への評価についての語につながっていった。また「山」を中心とした語でみた場合は、「川」、「沢山」、「好き」といった語が実線でつながっていた。「自然」に対しては「自然の中でリフレッシュできました」や、「周辺都市から短時間でアクセスできる」など、飯能市における自然を体験できる利点について言及している記述が見られた。このため、「自然資産評価」と命名した。

(2) 観光地としての評価

第2のグループは「観光」を中心に「楽しめる」、「スポット」、「魅力」、「少ない」、「人」、「多い」が実線でつながれる結果となった。「魅力」から実線でつながる「ハイキング」、については、「近場でハイキングができて、リフレッシュできる場所」といった飯能市の観光の魅力に言及している記述が見られた。また「観光スポットが少ない」、「ハイキングする時、標識が少ない」など、ネガティブな評価についても記述が見られた。このため観光地としての評価と命名した。

(3) 観光インフラ資産評価

第3のグループは「子ども」を中心に「行く」、「楽しい」、「公園」、「ムーミン」、が実線でつながれ、「多い」、「楽しめる」、「満足」が破線でつながれる結果となった。市内にある「トーベ・ヤンソンあけぼの子どもの森公園」と、テーマパークである「ムーミンバレーパーク」といった異なる観光施設に対する、子どもをつれた観光に対する記述が見られた。これらをふまえ「子ども」を中心としたグループについては、「観光インフラ資産評価」と命名した。

(4) 地域の魅力の評価

第4のグループでは「場所」を中心に「出来る」、「素敵」が実線でつながれ、「沢山」が破線でつながれる結果となった。「自然豊かで良い場所」、「いつでも満足できる場所」から、「北欧と呼ばれているが、そういった場所がわからない」、といった場所に対する評価と、「コロナ下の為目的以外の場所に立ち寄るのが難しかった」など具体的な場所を対象としていない記述が見られた。また「地元の野菜などが買える場所が欲しい」などの要望に関する記述が見られ

た。このため「場所」を中心としたグループについては、「地域の魅力の評価」と命名した。

(5) 食文化資産評価

第5のグループでは「美味しい」を中心に「満足」、「食事」、「空気」が実線でつながれる結果となった。「美味しい」は、飯能での食を巡る消費に関する記述が頻出していた。他方、「空気」については「自然豊かで食事も美味しく」という記述以外に、「美味しい空気、美味しい料理」といったように、自然に対する評価ともつながっている記述が見られた。このため主に食に関する記述を中心としたグループに対しては「食文化資産評価」と命名した。

(6) 地域インフラ資産評価

第6のグループは主に「道」を中心とした「駅」、「残念」と実線でつながれる結果となった。「施設」については飯能駅、東飯能駅、また道の駅に関する要望など、施設全般に対する評価の記述が中心であった。このため地域インフラ資産評価と命名した。

(7) その他

語としてのつながりは2つにとどまったが、サブグラフとして「良い」を通じて「キャンプ」につながる実線については、飯能市内のキャンプ場に対する評価の記述が見られた。

#### 4.4 頻出語と外部変数（年代、居住地）の対応分析

頻出語と外部変数の対応分析の結果をFigure 2, 3に示す。対応分析は抽出語に対して、それ以外の変数（性別や年代など）との関係を2次元の散布図に示す方法である。外部変数を用いることで、データを幾つかの部分に分けて、それぞれの部分ごとの特徴を見ることに適しているとされる<sup>12)</sup>。年代における結果図 (Figure 2) においては、原点付近に表示された語は、どの変数（年代：20代、30代、40代、50代、60代、70代）にも共通した語であり、原点からの距離が近い順に、取り立てて特徴的でない語と判断される。したがって、「自然」、「施設」、「豊か」、「行く」、「楽しめる」、「楽しむ」、「美味しい」は、各年代といずれも対応していない、特徴的でない語である。対して変数方向（年代）に向かって原点からの距離がより遠い語が、当該変数との関連度が高いと判断でき、特徴的な語と判断される。

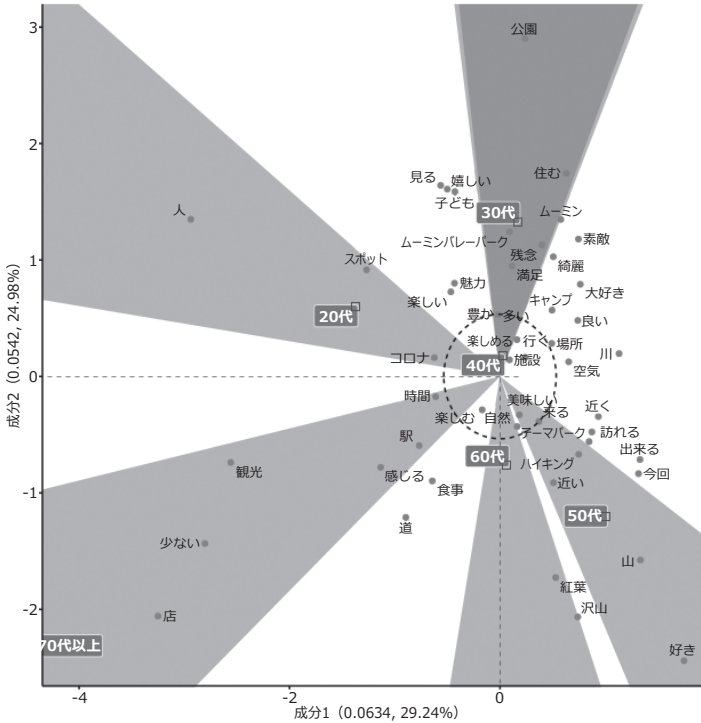


Figure 2 抽出語と年代の対応分析

「20代」においては、「人」、「スポット」、「コロナ」が特徴的な語となった。「30代」においては、「公園」、「住む」、「ムーミンバレーパーク」、「残念」、「満足」、「多い」が特徴的な語となった。「40代」においても同様の語が、特徴的な語となった。「50代」においては、「好き」、「山」、「近い」、「ハイキング」、「来る」が特徴的な語となった。「60代」は「沢山」、「紅葉」が特徴的な語となった。「70代以上」は「店」、「少ない」、「観光」、「感じる」、「駅」、「時間」が特徴的な語となった。

次に抽出語と居住地の対応分析の結果を示したものがFigure 3である。原点付近に布置されている語としては、「自然」、「場所」、「感じる」、「出来る」、「川」であった。これらは回答者の外部変数（居住地）といずれも対応しない、取り立てて特徴的な語として判断できない結果となった。

## テキストマイニングによる中山間地域における観光客の分析

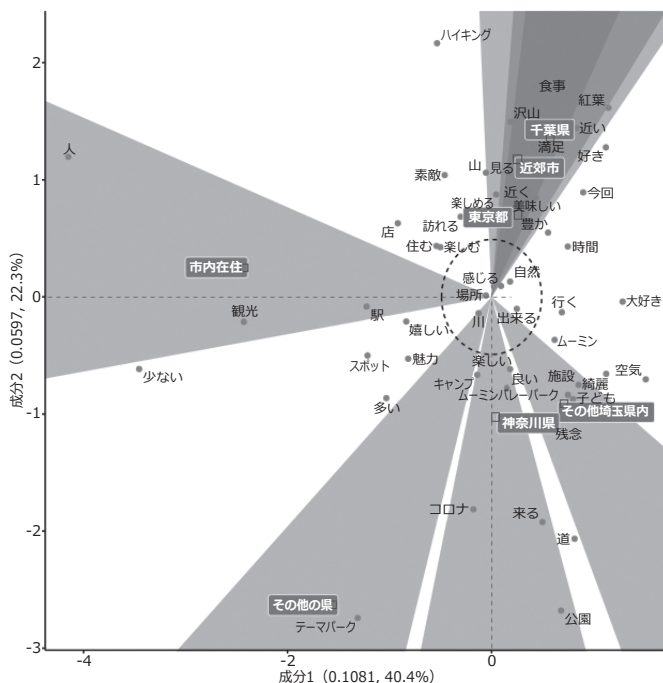


Figure 3 抽出語と居住地の対応分析

抽出語と外部変数（居住地）の関連度が高いものとして、「近郊市」,「東京都」,「千葉県」居住者の回答では、「近く」,「食事」,「沢山」,「満足」,「見る」,「楽しめる」といった語が共通して見られた。これに加え,「東京都」では「美味しい」,「千葉県」では「紅葉」が特徴的な語となった。「神奈川県」を居住地とする回答者については,「公園」,「来る」,「コロナ」,「良い」,「キャンプ」,「楽しい」が特徴的な語となった。また「その他埼玉県内」を居住地とする回答者については,「子ども」,「残念」,「施設」,「ムーンバレーパーク」が特徴的な語といえる結果となった。さらに「その他の県」の居住者の回答では,「テーマパーク」が,「市内在住」の回答者では「人」が,特徴的な語といえる結果となった。

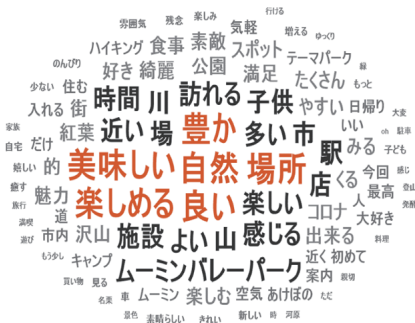


Figure 4 飯能市観光の満足度に対する理由のワードクラウド

#### 4.5 ワードクラウドによる分析

得られた語句データについて視覚化を試みたものが「ワードクラウド」である。テキスト内における単語の頻度が多いほど、大きく表示される特徴がある。Figure 4は飯能市の観光に対する満足度への理由に対する自由記述回答において、上位頻出語1,000の設定により抽出した。語句としては「飯能」、「観光」は除外している。このワードクラウドは飯能市の観光に対する満足感について、ポジティブな表現も、ネガティブな表現も同時に抽出している。結果は「自然」が語句としては最も中心に位置する結果となり、「豊か」、「美味しい」、「良い」、「場所」、「楽しめる」といった語句が頻出した。またそれを中心に、「ムーミンバレーパーク」や「子ども」といったその他の語句が頻出する結果となった。

## 5. 考 察

本研究では新型コロナウイルス感染拡大の時期において、飯能市における観光客の意向に焦点をあて、自由回答記述に対するテキストマイニングによりその実態を明らかにした。

本研究では首都圏近郊においても度重なる行動制限が課された時期にあたる。またかつては観光立国の宣言のもとに大きく拡大したインバウンド需要が一気に縮小し、入国自体が制限される状況下でもあった。こうした状況下においても、首都圏から1～2時間の範囲内で、いわば「マイクロツーリズム」が可能な地域の内の一つが埼玉県飯能市であった。

クロス集計における回答者の傾向としては、女性の方が多く、年代としては40代、50代を中心にそれ以下か以上の年代となる傾向であった。また居住地と訪問回数の分析では、回答者は数回程度より、相対的に飯能市を数多く訪問している傾向が見られた。飯能市近郊（所沢市、入間市、日高市、狭山市、秩父市）の居住者による、5回以上の訪問との回答が数多く見られたのに対し、東京都、千葉県、神奈川県といった近郊県の居住者では「初めて」との回答もそれなりに見られた。またそれ以外の県の居住者による回答が極端に少なかった点については、行動制限下における「自粛ムード」が影響したと思われる。世代別に見た場合、回答者において大別して30、40代のファミリー層が最も多い層であった。ついで40代から60代の夫婦が、これに続いた。

テキストマイニングの結果について、共起ネットワークおよびワードクラウドによる分析において、「自然」という語が最も多い結果となった。「自然資産評価」については、飯能市の豊かな自然とそれを活かした様々な取り組みが、回答者のイメージに反映される結果となったと言えよう。首都圏近郊の自宅から「近い」と感じることは、マイクロツーリズムの対象としても好条件を備えているといえる。また「美味しい」を中心とした「食文化資産評価」については、地元の産品についての言及やレストランなど食を楽しめる店舗についての好意的評価が数多く見られた。なお、2020年の秋に市内の観光スポットである天覧山の付近にオープンした発酵のテーマパークである、「OH!!! 発酵、健康、食の魔法!!!」についての言及も見られた。

「観光インフラ資産評価」については、2019年に開園した「ムーミンバレーパーク・メッツァビレッジ」に関してポジティブな評価が見られた。一方、以前から市内に存在し、「ムーミンバレーパーク」開園の契機となった都市公園である、「トーベ・ヤンソンあけぼの子ども森公園」についても多くの記述が見られた。同公園については大型のアスレチック場やレストランなども併設されているため、子連れの上で適した場所としての評価が多く見られた。一方で、交通アクセスは車が中心となる場所であるせいか、その点についてネガティブな評価が見られた。関連する「地域の魅力の評価」における「場所」を中心として見た場合、テーマパークなど特定の観光インフラ資産ではなく、抽象的な場所に対する評価も含めた記述が見られた。また、地域の魅力に対するポジティブな評価だけでなく、個別具体的な要望についての記述も混在する結



果となった。その上で、「出来る」については飯能市の観光全般において可能となる選択や、実際に経験した選択についてのポジティブな記述が多く見られた。また実線ではつながらなかったが、飯能市に点在するキャンプ場については好意的な評価が多い傾向であった。

「観光地としての評価」については、他の資産へのポジティブな評価に比べ、今後こうあって欲しいといった、要望に近い言及が数多く見られた。例として「スポット」については「観光スポット自体が少ない」といった評価があった。これは「多い」と実線でつながっているが、それは自然への言及であり、観光スポットの充実を求める記述が相対的に多い内容となっている。またこのことは「地域インフラ資産評価」のグループにおいてより顕著な内容となっている。特に「道の駅」が無いことに対するネガティブな記述、開設を求める記述が見られた。「残念」というネガティブな語句については、共通した傾向より、同様の要望に付随した個別具体的な評価が中心となっていた。

外部変数である「年代」と語句の対応分析結果においては、年代ごとに特徴的な語句が見られる結果となった。20代においては「コロナ」への言及が特徴的な語として見られたが、「コロナ禍」でも楽しめた様々な観光についての記述が多く見られた。この点も首都圏からのマイクロツーリズムとしての適地として見なされていた可能性がある。30代、40代においては、「公園」、「ムーミンバレーパーク」といった具体的対象と、「残念」、「満足」など評価に関する語句が、特徴的な語として共通した結果となった。この点については回答者における年代の関心事を一定程度反映している可能性がある。50代においても「山」といった具体的対象と、「近い」、「ハイキング」など評価と楽しみ方を予想させる語句が、特徴的な語となる結果となった。

外部変数として回答者の「居住地」を用いた語句との対応分析においても、ある程度それぞれの傾向の違いが見られた。回答者の中で相対的に大きな割合を占める飯能市の近郊市、東京都、千葉県で「近い」という語句が特徴的な結果となったのは、やはり交通アクセスの容易さによる評価であることが予想される。他方、ついで回答者層として多い「その他埼玉県内」では、同様の結果とはならず、「子ども」や「施設」、「ムーミンバレーパーク」といった来訪目的に関連した語と、評価に関する語が特徴的な語句となった点は興味深い。県内移動という点でマイクロツーリズムの条件をみたす地域に住む回答者にとっ

て、子連れの旅行先としての選択肢として見なされている可能性ある。また「神奈川県」で特徴的な語とされた「コロナ」については、「コロナが終わったら」、「落ち着いたら」という未来の希望を述べる回答が見られた。その一方で、「コロナ禍で、子供達に少しでも何か夏の思い出を」といった、行動制限が課せられた時期において何とか観光を楽しむことについての言及が見られた点が興味深い結果となった。

## 6. 今後の課題

本研究は新型コロナウイルス感染拡大期に、埼玉県飯能市への観光意向を持つ層を対象に実施されたアンケートに対し、主にテキストマイニング（計量テキスト分析）を行った。結果は、インバウンドが物理的に遮断されている特殊な状況下における、中山間地域の観光意向について貴重な示唆を与えるものであった。他方、アンケートはWeb上で回収されたものであり、元々飯能市への観光に関与の高い層が回答した可能性がある。また新型コロナウイルスの感染拡大期に飯能市へ観光を行った回答者と、感染が拡大する前に観光を行った回答者が混在しており、これらをふまえるとデータ収集上の偏りの課題が存在する。

新型コロナウイルスへの対応を考えながら、観光消費に向き合うという状況は2022年時点においても変わっていない。国土交通省が2021年から実施している調査によれば、時期によって変動はあるものの、旅行を「とてもしたい」、「したい」とした回答が7割を超えているという。また新型コロナウイルス感染症の拡大収束後の旅行先として、「居住する都道府県内」、「居住地域と隣接する都道府県」など、比較的近場で旅行したい人が多い傾向が見られたとしている<sup>13)</sup>。こうした需要と向かいながら、首都圏近郊で手軽に自然を満喫できる距離圏にある中山間地域において、今後の観光のあり方について実務的課題は山積している。他方、小林（2021）に指摘されるように、新型コロナウイルスとの共存を考える社会では、これまでの関係人口増から移住を最終目的とした一方通行型の「関係の階段」の見直しが示唆されている<sup>6)</sup>。また、「関係人口の多寡は、地域づくり活動の活力を表すリトマス試験紙のようにも捉えることができる。」との指摘もある<sup>14)</sup>。未だ観光業のみならず人々の暮らしそのものについて楽観視はできない状況にある。だからこそ今できることにとどまらない、

創造的適応を模索していくことが重要だろう。さらに、こうした実情をふまえながら今後はより精緻なデータの収集と、それにもとづいた分析を重ねていく必要があるだろう。

## 謝辞

本研究に協力頂いた一般社団法人奥むさし飯能観光協会に感謝する。

## 注釈

注1) JTB総合研究所Webサイト, 星野リゾートWebサイトより

注2) 国立社会保障・人口問題研究所, 2018年3月推計

注3) 一般社団法人奥むさし飯能観光協会に対するインタビューにもとづく(2022年1月28日実施)。

注4) 各自治体Webサイトより

## 参考文献

- 1) 日本政府観光局(参照2022.5.30)「訪日外客統計」, 入手先〈<https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/index.html>〉
- 2) 観光庁(参照2022.5.30)「旅行・観光消費動向調査(確報)」, 入手先〈<https://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/shouhidoukou.html>〉
- 3) 総務省統計局(参照2022.6.15)「住民基本台帳人口移動報告」, 入手先〈<https://www.stat.go.jp/data/idou/index.html>〉
- 4) 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局(2020)「移住等の増加に向けた広報戦略の立案・実施のための調査事業報告書」, 内閣官房.
- 5) 筒井一伸・嵩和雄・佐久間康富(2014)『移住者の地域起業による農山村再生』小田切徳美監修, 筑波書房.
- 6) 小林哲(2021)「コロナ禍での地域ブランディング—地方活性化策の点と線」, マーケティングジャーナルVol. 41, No. 1, pp. 29-40.
- 7) 小田切徳美(2019)「「関係人口」とは何か?—その背景・意義・可能性」, *CEL, Culture, energy and life*, 123, pp. 26-31.
- 8) 岡本岳大(2020)(参照2022.6.15)「「コロナ後の旅行」は“3つの点”で大きく変わる」, 『東洋経済』, 入手先〈<https://toyokeizai.net/articles/-/354108>〉

- 9) 村山慶輔 (2020) 『観光再生 サステナブルな地域をつくる28のキーワード』 プレジデント社.
- 10) 総務省 (2020) (参照2022. 6. 15) 「令和2年度国勢調査」, 入手先 <<https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2020/index.html>>
- 11) 飯能市 (2022) (参照2022. 6. 20) 「第5次総合振興計画」, 入手先 <<https://www.city.hanno.lg.jp/article/detail/193>>
- 12) 樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して (第2版)』 ナカニシヤ出版.
- 13) 国土交通省 (2022) (参照2022. 7. 15) 「令和4年版 観光白書」, 入手先 <<https://www.mlit.go.jp/statistics/file000008.html>>
- 14) 小田切徳美 (2021) (参照2022. 7. 15) 「「関係人口」の見方」, 全国町村会, 入手先 <<https://www.zck.or.jp/site/column-article/21082.html>>